

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	松下 優一
主 論 文 題 名： 〈沖縄文学〉の社会学——大城立裕と崎山多美の文学的企てを中心に				
(内容の要旨)				
<p>本論文は、沖縄で書く二人の作家（大城立裕と崎山多美）を対象に、小説を書くという行為についての社会的考察を企図するものであり、文学を社会学の研究対象にする場合の視座と方法を検討する第Ⅰ部と、具体的な文学的事象を分析・検討する第Ⅱ部・第Ⅲ部から構成される。</p> <p>第Ⅰ部では、本論文が依拠する文学社会学の方法論的立場についての説明であり、ブルデューが構想した文学社会学を作家・作品分析のための理論として吟味したうえで、大城立裕と崎山多美の文学的实践を社会学の研究対象に据えるための視座と具体的課題を設定している。</p> <p>第Ⅰ章では、文学社会学の流れを簡単にみたうえで（第Ⅰ節）、ブルデューによる作家・作品研究（フローベール『感情教育』論）を検討し、作品の内容・形式的特徴を作家が参入する文学場の状況（〈場〉が提供する可能的選択肢）との関係で理解しようとするものだとを確認する（第Ⅱ節）。続いて、ブルデューの議論がどのような文学社会学の地平を拓こうとするものであったのかを、彼がその方法論を立ち上げるうえで差別化を図ったところの理論的立場（マルクス主義／サルトル／フォルマリズム）との関係で捉える（第Ⅲ節）。そのうえで、ブルデューの視座による文学社会学上の利点が文学に対する内在分析と外在分析の二律背反を乗り越える視座を提供していること、文学場と美術場の関係など相対的に自律した〈場〉同士の比較分析、文学概念の相対化などにあることをA.ヴィアラらによる指摘にしたがってまとめ（第Ⅳ節）、仏語圏でどのような応用研究がなされているのかを概観した（第Ⅴ節）。</p> <p>第Ⅱ章では、ブルデュー派による一連の研究に対し、方法論的なレベルでどのような限界・批判が提出されているのかについて、主としてジョフロワ・ド・ラガヌリの議論を参考に整理した。具体的には、ブルデューの理論枠組みの限界・問題点として、①「創造」の問題（作家・作品の個別性）が十分に捉えられないこと、②場の範囲が既存の専門領域に限定されてしまっていること、③場の自律性を強調すると他領域との関係が捉え切れないこと、④読者は場に囲い込めないこと、⑤作品を作家に従属させていること、が指摘される（第Ⅰ節）。第Ⅱ節では、こうした理論上の問題点に対する一定の見解を示した。テキストと読者の問題に関しては、「立場決定」の概念から作品とその他作家言説を区別すること、また作家の位置に部分的に規定されつつも意味の余白を残して読者へと回送されていくものとして作品を捉えることにより、場に規定される部分と他の社会的規定因とのせめぎ合いを読み取っていくことに文学場の社会学による作品読解のポイントを再設定しうること、また、文学の自律性と他律性、場の複数性の問題については、日本文学場と沖縄文学場の関係、あるいは知識人場との関係といったかたちで、沖縄文学を対象化する場合に重要な論点になることを確認した。そのうえで、作家・作品分析のための文学社会学理論として、ブルデューの場の理論を用いる場合、作家が参入する場の状況はどうなっているのか（可能態の空間）、作家はそこにどのような位置を占めようとしたのか、あるいは生み出そうとしたのか（立場決定）、そしてその位置においてどのような作品が具体化されたのか（テキスト）、が論点となることを指摘した。</p>				

第3章では、沖縄文学、そして大城立裕／崎山多美を分析対象に据える場合、文学社会学が引き受けるべき具体的問題を明らかにしている。まず、「沖縄文学」はいかなる文学として想像されてきたのか、どのような作品がどのような基準で「沖縄文学」と名指されてきたのかという点に文学社会学が解明すべき問題があること、作家や出版者・批評家たちに分有する「文学」の像を本研究では〈沖縄文学〉と呼ぶこと。その文学の像が分有され、それをめぐる駆け引きが生成するような〈場〉として「〈沖縄文学場〉」を捉えることを確認した(第1節)。その場合、具体的な検証課題となるのは、作家たちは書かれるべき〈沖縄文学〉をいかに構築し、あるいは流用し、あるいは脱構築しようとしてきたのかという点であるが、1997年の地方紙の座談会における崎山多美が既存の沖縄文学の乗り越えを図ろうとする言明は、文学的立場決定(大城立裕が構築した〈沖縄文学〉に対する絶縁)として捉えられる(第2節)。そのうえで、崎山が既存の沖縄文学の乗り越えを図る際の機軸に据えたところの言語(「方言」)の問題、それが文学場の社会学に対して提起している課題、および先行研究について検討した(第3節、第4節)。

第II部で考察されるのは、崎山多美がそれに対して抗おうとしたところの〈沖縄文学〉の構築に大きく関与した大城立裕の文学理念(文体および創作主題)である。

第4章では、大城立裕というアクターの制度的役割(1970年代から1990年代まで、沖縄エリアにおける文学賞選考に携わり、書かれるべき沖縄文学を方向づける地位にあったこと)を確認したうえで(第1節)、大城立裕の文学言語および「方言」に対する考え方を検討した。第2節および第3節では、大城が1960年代に試みていた「実験方言」(登場人物の会話文語尾を中心にした、沖縄方言を日本語テキストに文語化して再現しようとする試み)と、大幅に方言を取り入れた文体で評価を受けた東峰夫「オキナワの少年」の芥川賞受賞を契機とするその放棄について概観した。第4節では、若手作家(場への新規参入者)たちに対する方言使用批判の論点を整理し、その背後にある言語観を明らかにした。「ナマの方言」「ヤマトウチナーグチ」「充て字」に対する批判からは、言語を透明な意味伝達の媒体とみなすこの作家の道具的言語観が伺える。第5節では、この言語観およびそれに基づく方法論(日本語に翻訳不能かつ日本語の表現領域を拡大しうる「語彙」に限定する方言使用の基準)が、「実験方言」と矛盾するものであることを指摘する。第6節では、この方法論とセットになった言語観の変化が起こった理由を、東峰夫に対する位置取りの作動という観点から把握しようとした。

第5章では、この作家の文学理念とその由来、およびそれに対する先行研究を整理し、沖縄をめぐる同時代的な言説状況に配慮しつつ、この作家の掲げた文学がいかなる要求に応えるものとしてあったのかを考察している。「復帰」(1972年)以降の大城が掲げることになったのは、「普遍的」な文学的価値を生み出すために、沖縄文化を掘り下げ、その深層にある何らかの本質(「神話」)を発見し作品化するという方法であった。そうした文学理念を大城に伝授したのは、アイルランド文学研究者・米須興文である(第2節)。そこに観察される、作家自身が批評家の理論枠組みを自らのものとして引き受け、長年の創作テーマに据えるという現象について、〈場〉における位置取りの問題として捉え、第3節では大城が参入する文学の場における位置取り、第4節では知識人場における位置取りについて検討・考察を行った。そこで指摘される絶縁／位置取りの契機としては、まず1950年代後半＝「琉大文学論争」における新川明ら「社会主義リアリズム」を掲げる文学者たちの登場、次に1960年代後半＝芥川賞受賞による「日本文学」の圏域での聖別／「沖縄問題」の書き手としての本土メディアからの役割期待、さらに1970年代初頭＝東峰夫の参入、という3つの契機が見いだせる。3つの契機が発動させた作家が文学作家として参入している〈場〉だけではなく、文学場とは分析的に区別される「知識人場」における復帰論および反復帰論に対する二重の絶縁という契機も関わっていることを示唆した。大城の文学理念(「神話」論)は、これらの諸契機が折り重なったところに召還されたものとして分析できると結論付けた(第5節)。

第Ⅲ部では、90年代後半に、大城立裕の文学的立場ないし彼がその構築に大きく関与した〈沖縄文学〉に対する違和感を表明し、それとは差異化された位置を見出そうとしていた崎山多美が、具体的にどのような作品を書いていくことになったかを検討している。

第6章では、「シマコトバ」によって特徴付けられる2000年前後の崎山作品の文体について検討している。第2節では「ムイアニ由来記」（1999）における“日本語の中の異物としての方言”，第3節では「ゆらていく ゆりていく」（2000）における“日本語と混淆する方言”，というかたちで、方言の使われ方に着目してその文体的特徴を整理した。さらに、第4節では、崎山のエッセイ「『シマコトバ』でカチャーシー」をもとに、大城立裕と崎山多美との間に交わされた文体をめぐる“論争”を再構成し、それが場における対抗的な位置取りであると同時に、両者の言語的ハビトゥスの差異という観点からも捉えられることを指摘した。

第7章では、「ゆらていく ゆりていく」の作品論を試みた。何がどう語られているかという点に注目し、沖縄文学を賭け金とする〈場〉においては排除されてきた文学的可能性（SF／夢小説）を提示しようとするものとして、この作品を捉えられるのではないかという見方を提示した。

第8章では、作家・崎山多美の一貫した創作の主題である「シマ」のテーマを、主人公に感受される“音”という要素に注目しながら辿り直した。とりわけ初期作品において、音響という要素は、主人公と「シマ」とを媒介する機能を果たしている。しかし、90年代後半以後、音は主人公を触発するが、「シマ」を不完全なかたちでしか媒介しなくなる、ということを確認した。

第9章では、基地の街“クジャ”を舞台とする2000年代後半の短編作品群を取り上げている。まず各作品に登場する人物の形象に注目すれば、そこには共通して“声”とそれを“聴く者”が現れていることが確認される（第2節）。また各作品には、儀式の場あるいは舞台に模された空間が、何かを呼び寄せようとする場のごとく生起していることも指摘しうる（第3節）。しかし他方で、そこで繰り返されるのは失敗や頓挫であり、記憶の想起あるいは共有の困難という主題が基盤にあることも指摘しうる（第4節）。こうしたことから、ゼロ年代後半の崎山作品においても、音の触発が、核心的な何事か（想起すべき記憶）の現われに結びつかず、儀式の場を構成していた諸要素が断片的なかたち、あるいはちぐはぐなかたちでしか現われ出なくなっていることが見て取れる。そこには“シマ”を描くことへのためらい、言い換えれば書くことの矛盾が折り返されている。そして、そのように書くこと自体へのリフレキシヴィティを加速させる契機として、大城立裕がその構築に大きく関与した〈沖縄文学〉に対する絶縁＝立場決定があったのではないかと論じた。

「結論」では、3つのパートを通じた検討・考察から示唆される論点について整理した。ブルデューの議論は、作家自身が掲げる文学的立場を分析するために相応の説明力を持つということが確認される一方で、とりわけ沖縄のような地理的・言語的周辺性をしるしづけられた文学空間における文学実践を考察するためには不十分な部分があることも確認された。自律的な文学場のみならず文学生産は囲い込まれておらず、他律的なもの（政治的状況など）に大きく影響を受けていることもまた見えてきたからだ。そこでは文学賞、批評という文学制度の審級あるいは知識人場などが、社会状況・政治状況と文学とを媒介する機能を果たしている。具体的なテクストを中心において、文学場、文学制度、知識人場など文学生産を規定する諸要素のせめぎあいを読み取っていくことが今後の研究課題として残された。